

【ねがいましては】

平成17年1月6日

第172号

KYOWA SCHOOL

「夢見る力」

ふとTVに目をやると、吉永小百合さんが語っています。『北の零年』という映画のことだそうで、そのときふと語られた言葉に耳が止まりました。「夢見る力」・・・。

「そうか、たしかに子供たちから『夢』がなくなっているのかな。」心の中で呟くと、「私は・・・あるなー。」と・・・。『子どもたちのこころを救いたい。』これがやはり夢に続いているのです。私を見つめるキラキラとした瞳。笑顔。これって世界中のどこへ行っても、共通する平和への条件としか言いようがありません。

まじめな子ほど傷ついてゆく心。

ゆずり合おう、助け合おう、親切にしよう、などと当たりまえなことを当たりまえにやろうとすると、「かっこつけるな。」とか、「内申上げようとしてるんだろう。」とか、とんでもない言葉が突き刺さってくる・・・学校。ゆずりあおう、助け合おう、親切にしよう、ということで、本当にそうしたら、テストの点数を逆転された。そしたら親に叱られた。なぜ、なぜ、なぜ・・・・。

誰もが当たりまえと思うことを当たりまえにやって、そしたらその分しっかりと教室が明るくなって、自分も元気が出で・・・・。そんな当たりまえな教室を作り上げてゆこう。その一心で歩き続けている自分が、ここ数年、子供たちだけでなく、ご父母の方々の暖かいお気持ちを感じるまでになったことを、私は心から感謝しております。

先日、高校生を連れて食事に行った折、こんなことを話しました。

「子どもたちの前で、『兎の眼』の読み聞かせでもしたらどうかな、子供たちも全員が同じ本を持って、読んでいるSちゃんが途中で感極まって読めなくなるかもしれないけどね。皆じっと一点に目をやり、わからない言葉が現れたら、普通に手をあげ質問する。初めての漢字が現れたら、あとで練習する。そして最後まで読みきる・・・・。きっと子どもたちの食い入るような瞳、すごいと思うよ。」

彼女自身が、すでにギラギラしています。読むほうも、聞くほうも、みんながギラギラしています。これって本物の勉強だと思います。しかもテストで習熟度を判定する必要もありません。なぜなら、ここは学校ではありません。義務教育制度の縛りつけに会う必要がないのです。私自身もその光景を初めから終わりまで、そっと見守っていました。そしてお母様方にもご覧になっていただきたいのです。

ゆずり合いながら、助け合いながら始まる『兎の目』。読み終えたときのみんなの心。Sちゃんの心。お母さんたちの心。そして私の心。

どこまでもどこまでも続く透明な気持ちたちが、この教室を包み込む。その気持ちは、やがてこのちっぽけな教室を飛び出し、これが本物の学校だよーって、さえぎりながら飛び回る。そしてみんなの気持ちは、やさしさと思いやりだけに包まれている。そのままの心で、夕食を家族みんなでいただく。家庭いっぱいに広がる幸せの色。その時思う親の心。

「あー、この子に会えて本当に良かった。あー、君と結婚したことを、心から良かったと思っているよ。」

子供たちが学校から幸せを連れて帰ってくる。そんな学校を『夢見る力』で追いかけてゆきたいと思っております。

その力を与えてくれるのが、子供たちであることは間違ひありません。

先日、アイススケートへ行ってきました。総勢20名。中3の女子が幼稚園年長さんの女の子を抱えながら、すべっています。4年生の男の子が、女子高校生と手をつなぎすべっています。みんなみんな笑顔です。

お友達として初めて参加した中3の女の子も、こんなにもばらばらな学年同士の団体が、こんなにも仲良くしているのを見、きっと心をあたたかくされたことと思います。

そうなんです。私たちは知らない間に、その他の人たちをあつたかさんへと変身させているのです。みんなは気がついていないかもしれないけれど、自然にその力をその心の中に宿しているのです。

これからも、どんどんあつたかさんたちを作り上げてゆこう。

君たち自身があつたかさんだから、君たち自身があつたかさんであるかぎり、この教室はずつとずっとこのままであり続けると思います。なぜって、私の『夢見る力』はなくならないからです。

そしてこれを読みいただいた、ご父母の皆様すべての方が、あつたかさんであるからです。

ありがとうございます。

※ 『兎の眼』・・・灰谷健次郎（角川文庫）・・・ひとりの少年と、それをとりまく先生、子供たち、家族の心温まる物語です。

1月の予定・・・14日（金）珠算・暗算検定試験 申し込み締め切り

26日（水）～28日（金）検定試験実施・・・KYOWA SCHOOL

